編 集 後 記

今年度も変わらない時期に国立公園研究所年報第５号を発行することが叶いましたが、中島研究所長の巻頭言にありますように、昨今のコロナ禍によって引き起こされた未曽有の事態は、昨年度発行時との状況を比較すると、世の中が確実に不自由な方向へと向かっていることがわかりながらも、先行きが依然不透明であることを非常に残念に思います。

本研究所では設立以来、国立公園や保護地域、環境保全や動植物保護等について学内外を問わず積極的に啓発を続け、これまでにフォーラム、シンポジウム、研究発表の場を設けては参加者へ呼びかける機会を得ていましたが、今年度に入ってからの緊急事態宣言や、大学への入構禁止措置、教職員はこれまでの対面授業とはまるで勝手が違うオンライン授業への準備作業等で、とてもそのような機会を設けられるような状況にはありませんでした。

今年の学園祭時には、当初「国立公園を音楽とともに楽しむ」趣旨の対面での演奏会を計画しておりましたが、この事態を受けて学園祭は完全オンライン中継と決定しましたので、本研究所の催しは「国立公園映像コンサート」として、動画を流す企画に変更となりました。

ところが幸いなことに、日光・尾瀬国立公園等の風光明媚な景色の写真を堪能しつつ、この企画にご協力いただいた「マロニエトリオ」の皆様が演奏された、クラシックや童謡等の音楽を視聴する形式が予想を超えて素晴らしく、学内外でも大変好評を博し「禍転じて」という結果になりましたことを、学園祭終了直後の今、ここに記録しておきます。

また、昨年度の学園祭時に開催しました本研究所のイベントは、「日光国立公園がやってきた！」と題し、その内容を本号にて報告しております。その企画のうちの一つとして、日光市土呂部地区で里山保全の目的でつくられる「茅ボッチ」の実物を教室に持ち込んで展示しました。茅場で刈り取った枯草の秋らしい香りを感じ、茅ボッチの頭部分に差したススキの穂からふわふわした種がこぼれ落ちて、窓から入る風に乗って舞い上がる様子を見ていますと、本学の小さな教室の中にいるにもかかわらず、そこに美しい土呂部の里山の光景が大きく広がっていくような気がしたものです。

今号の論説・論文・研究報告につきましても、ロックダウンや長距離移動自粛などの困難な状況下にもかかわらず、所員の先生方のたゆまぬ調査・ご研究の成果物としてご報告することができました。ぜひご高覧いただきたく思います。

末筆ながら、今回も年報編集委員長の油井先生をはじめイベント開催にご助力をいただいた皆様、そして本号の編集・発行作業に際して御協力を賜った関係者の皆様に対し、心からの御礼を申し上げます。

江戸川大学学術情報課　紀要事務担当
高橋　恵美